

「～ハ～テイル」引用文の論文中での使用目的

清水まさ子

要旨

本調査では、人文系論文における「～ハ～テイル」引用文の論文中での使用目的を調査した。その結果、以下の7つの使用目的が確認できた。①自分の主張を支持する意見として出す。②先行研究の不十分さを表すために出す。③自分が述べていること具体例を出す。④自分が示した具体例を一般化するものとして出す（この分類には下位分類2つを設定した）。⑤これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す。⑥論点を分析する観点を出すために提示する。⑦具体例として出しながら、同時にいろいろな視点を提供する。これらの用例数を調査したところ、極端に多い傾向を示しているものはなかったが、今まであまり注目されてこなかった「別の視点を提供する」という目的も多数使われていることがわかった。また、上記①～⑦のうちのいくつかの使用目的が重なり合っている「複合」も多数あることがわかった。

キーワード

人文系論文、「～ハ～テイル」引用文、引用文の使用目的

1. はじめに

大学や大学院に通う留学生は日本語で論文を書く機会が多くあるが、論文を書く留学生にとって先行研究を引用する文の書き方を学ぶということは非常に大切なことである。筆者の経験によると、引用文の書き方が分からず、結果「剽窃」と取られる書き方をしてしまうケースがしばしば見受けられるからである。

引用文の書き方を指導するための参考となる調査として、清水（2008、2009）や二通（2009）がある。清水（2008、2009）では人文系論文における先行研究を引用する際の引用文の表現方法について調査し、いくつかの表現方法パターンを示している。また二通（2009）では、さらに引用文の表現方法を体系的に示し、留学生に引用文を指導する際のモデル作成を目指している。論文における引用文研究は始まったばかりであり、調査としては上記のように引用文の表現方法を対象とするものが多い。

しかし表現方法だけでは、まだ引用文の書き方を教える際に不十分であると言える。表現を教えて学習者に実際に書いてもらう前に「実際に引用文がどのような目的で使われるのか」を明確に提示する必要があるのではないだろうか。論文中での引用文の機能を明確にし、その重要性や利便性を説くことは剽窃を防ぐことにもつながると考えられる。

そこで本調査では人文系論文を対象に、先行研究を引用する文が論文中でどのような目的によって使われているのかを見ていく。

2. 先行研究

2. 1 論文における引用文の表現方法

論文中における引用表現方法は、多くの論文の書き方参考書で紹介されているが、最も体系的にまとめられているのが二通（2009）である。下記の引用モデルは、その引用文が

		A 著者にフォーカス ←	→ B 事柄にフォーカス	
直接引用	引用表現あり	<長い引用—独立した段落で> [著者]は次のように指摘している。	<長い引用—独立した段落で> ~について次のような指摘がある。	引用 ↑
		<短い引用—語や文の切り取り> [著者]は「.....」(頁)指摘している。	<短い引用—語や文の切り取り> 「.....」という指摘がある。	
間接引用	引用表現あり	<言い換え、要約> [著者]は~と指摘する [著者]によると、~という/~である。	<言い換え、要約> ~と指摘されている。 ~という意見がある。	参照 ↓
		<名詞化> [著者]は~(こと)を明らかにした。 [著者]は~の可能性を示唆している。	<名詞化> ~(こと)が明らかになった。 ~の可能性が示唆されている。	
	引用表現なし	<文献の存在の提示> ~については[著者]の研究がある。 [著者]の手法を用いて実験を行った。	<文献の存在の提示> ~についての研究が行われている。 ~法を用いて実験を行った。	
			<直接的な文の形> ~は~である。(事実/意見) ~については~と考えられる。	

図1：論文における引用のモデル（二通 2009：p 71）の図3を転写）

何をフォーカスしているかという点と、論文への文章の統合度という点⁽¹⁾、の2つの軸を併せ持った引用文のモデルである。

それでは、引用文の文末形式はどのようになっているのだろうか。論文の書き方参考書では引用文を書くときの方法として、モデル文がいくつか紹介されている（浜田他 1997、大島他 2005、二通・佐藤 2007 など）。そのモデルを見てみると、文末はテイル形であることが多い。なぜテイル形文末の引用文が多く紹介されているのだろうか。この理由についてはテンス・アスペクトの観点から説明できるだろう。工藤によれば、テイル形は「現在パーフェクト」（工藤 1995:p99）を持っており、それは過去の記録と現在を結びつける機能であるという。それゆえ過去の記録である先行研究を現在の論の中に引用する際には、両者の間に関係を持たせるために、引用文末にテイル形がよく使われると考えられているのではないだろうか。

2. 2 論文の書き方参考書における引用文の目的についての記述

引用文の使用目的について書かれた先行研究に小林・船曳（1994）、奥田他（2000）、佐渡島・吉野（2008）があるが、最も具体的に示したものは佐渡島・吉野である。佐渡島・吉野は引用文が使われる目的を6つ挙げている。

- ① 自分の主張を支持する意見として出す。自分の主張を強化する。
- ② 自分の主張と反対の意見として出す。引用内容を打ち消すことによって自分の主張を強化する。
- ③ 自分が述べていること具体例を出す。
- ④ 自分が示した具体例を一般化するもの（解説するもの）として出す。
- ⑤ これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す。
- ⑥ 論点を分析する観点を出すために提示する。 （佐渡島・吉野 2008：p74）

佐渡島・吉野で述べられている目的は以上の6分類であるが、佐渡島・吉野が「他にも

引用をする場面はあるでしょう」(p74) と言うように、実際の論文で使用目的の調査を行った場合、以上の使用目的以外のものも出てくるのではないだろうか。また実際に引用文の使用目的を分類した場合、用例数に偏りは見られるのであろうか。

3. 本稿の目的

本調査では佐渡島・吉野(2008)で示された引用の目的をもとに、実際の論文中で引用文がどのような目的で使われることが多いのかを調査する。またそれぞれの使用目的における用例数を求め、目的間に偏りが見られるのかを調査する。

本調査では先行研究をふまえて、調査対象とする引用文の表現方法を以下のように設定し、以降この引用文を「～ハ～テイル」引用文と呼ぶ。

<本稿で調査対象とする引用文>

(引用元名) は==== (引用動詞) テイル。

例) 田中(2001)は最近風邪がはやっていると述べている

本稿で調査対象としたのは、二通のモデルにおける著者にフォーカスが置かれている引用文(以下、著者フォーカス引用文と呼ぶ)である。この引用文に注目した理由としては、事前に行った調査で著者フォーカス引用文が事柄にフォーカスが置かれている引用文(以下、事柄フォーカス引用文)よりも2倍近く多かったため、より一般的な表現であると考えたからである⁽²⁾。もう一つの軸である「論文の文章への統合度」については、本調査では考慮に入れなかった。本稿では、まず著者フォーカス引用文全体の使用目的の調査を行ってから、後稿で文の文章への統合度という軸について触れようと考えたからである。また本稿では引用文の文末に引用動詞を含むものを採用した。その理由としては、引用動詞を含まないものは参照に近く地の文に統合されていると考えられ、すでに引用文として考えられないからである。

4. 調査概要

4. 1 調査方法

本調査の調査方法は次のように行う。

- ① 佐渡島・吉野(2008)をもとに、「～ハ～テイル」引用文を分類し、実際の論文中における引用文の使用目的を記述する。
- ② ①で示した分類をもとに、用例数を数える。

4. 2 調査対象資料

人文系論文5分野、1種類につき10編、計50編を調査対象とした。

今回は『学会名鑑』(2004)において「人文科学部門」に分けられている分野からそれぞれ会員数が最も多い学会を選び出し、その学会が刊行している学術雑誌を選んだ。調査対象とした論文は2007年4月時点で最新のものから選んだ。今回の調査は「論文」ということで、「研究ノート」や「書評」は対象にしなかった。以下は、論文の詳細である。

『国際政治学研究』(国際政治学会) 10編 (総文数: 1,802 総文字数: 130,821)

『英文学研究』(英文学学会) 10編 (総文数: 1,481 総文字数: 126,749)

『現代経済学の潮流』(日本経済学会) 10編 (総文数: 2,788 総文字数: 167,060)

『考古学研究』(考古学研究会) 10 編 (総文数: 2,422 総文字数: 155,354)
『心理臨床学研究』(日本心理臨床学会) 10 編 (総文数: 2,097 総文字数: 135,408)

5. 結果と考察

5. 1 「～ハ～テイル」引用文の使用目的の分類

ここではまず、2.2 に示した佐渡島・吉野 (2008) の引用の目的をもとに、具体的な例を示しながら概観していく。本調査においては佐渡島・吉野で示された引用の目的を踏まえて新たな提案を行った箇所が 2 箇所 (以下の②と④) と、新たに追加する目的が 1 つ (以下の⑦) あったが、それについても併せて述べていく。

<①自分の主張を支持する意見として出す。自分の主張を強化する。>

以下の 1) は「①自分の主張を支持する意見として出す。自分の主張を強化する。」という目的で使われるが、この目的は小林・船曳 (1994) や奥田他 (2000) でも言及されており、引用文の使用目的としては上に挙げた 6 つの分類の中で最も代表的なものであると言える。この例を以下に示す。

- 1) クライエントにとって、治療関係が安全な雰囲気、安全なものとして認知されなければならない。佐治ら (1996) は、“カウンセラーの基本的な姿勢として重要なのは、『安全な信頼関係』を創り上げなければならない。その底流には、今ここで……関係性の安全が要請される” (p. 183) と述べている。

(心理学)
(* 下線は筆者加筆)

上の 1) では、下線部の直前に「クライエントにとって、治療関係が安全な雰囲気、安全なものとして認知されなければならない。」と論者の主張が書かれており、その直後に下線部の引用文によって、その主張と同じ内容を述べている先行研究を引用している。このことによって、主張を強化していると考えられる。

<②自分の主張と反対の意見として出す。引用内容を打ち消すことによって自分の主張を強化する。>

本調査で佐渡島・吉野の②の引用の目的と近い例であると認識できたのは、以下のような例である⁽³⁾。

- 2) 大英帝国の歴史叙述に不在であった女性の姿を可視化し、彼女たちに主体性を回復させようというのが昨今の研究動向であるが、Joanna Trollope は早くも *Britannia's Daughters* (1983) において、植民地をめぐる英国女性の活動に関する過少評価を修正しようとしている。Mary Poovey も *Uneven Developments* (1988) のなかでこの見方を踏襲し、(*途中省略) ナイティンゲールは象徴的存在になったと結論付けている (198)。プーヴィイは、(*途中省略) 国内の貧しい人々とインドを「治癒する」(cure) という構図でナイティンゲールの看護改革を読み解いている (196)。しかし、トロロウプとプーヴィイの論考では、インドの衛生、土地所有法、教育をめぐるナイティンゲールの仕事は具体的に分析されていない。一方、インドに関するナイティンゲールの著作を詳細に紹介しているのが、インド出身の研究者 Jharna Gourlay の *Florence Nightingale and the Health of the Raj* (2003) である。

(英文学)

3) (*途中省略) さらに, (*賀川光夫氏は)「コメ以前の農耕の生産性は、投下された労働人口に比して必ずしも高いとはいえない」と説明している(賀川前掲:16)。このような見解から、手鋤(小型打製石斧)が賀川氏による晩期農耕論の鍵となる道具であることがうかがわれる。しかしながら、現在まで筆者の観察する限りでは、小型の打製石斧とされている石器群中には、土掘り具としての用途を想定しにくい石器(例えば打製刃器類)が含まれている場合がある。現在、「打製石斧」と一括されて認識されている石器群内での形態やサイズのバリエーションとその解釈については、時期差や変形の問題だけでなく、打製石斧がそもそも「土掘り具」とみなせるのかという問題から再検討する必要がある。 (考古学)

2) では、下線部で「Joanna Trollope」と「Mary Poovey」の見解を述べ、その後波線部で、両者の論考についての不十分な点を指摘している。そして、それらの不十分な点を補完するような先行研究を挙げている。また3)での下線部は「賀川光夫氏」の見解を述べた引用文の一部分である。この「賀川光夫氏」の見解について不十分な点を、「しかしながら」の波線部の後で指摘している。そして二重下線部で示したように、先行研究の不十分な点の指摘を踏まえて、論者の意見が書かれている。

このように考えると、本稿では佐渡島・吉野の②で示された引用の目的に対して新たな提案ができると考えられる。まず佐渡島・吉野の②ではく引用内容を打ち消して、自分の主張を強化する>とあるが、引用内容を全否定して新しい自分の主張を組み立てているというよりも、3)のように先行研究の不十分な点を踏まえて、自己の意見を書いたり、2)のように不十分な点を補完する他の先行研究を用いて話を続けるなど、先行研究の不十分さをふまえて次の話がが続いている。また②の目的を示した文の冒頭に、「自分の主張と反対の意見として出す」とあるが、2)のように、先行研究の不十分な箇所の指摘だけで、自分の主張までを述べていない用例もある。また3)のように、確かに二重下線部の箇所のように自己の主張を書いているが、引用文が自己の主張と「反対」であるかどうか疑問である。以上の考察を踏まえ、本稿では佐渡島・吉野の②の引用の目的をふまえて、以下のような目的を提案する。

<佐渡島・吉野の②の引用の目的をふまえた提案>

先行研究の不十分さを表すために出す。先行研究の不十分さを指摘することによって、その不十分な点を補完する内容を続けたり、また不十分な点を踏まえた上で主張を行う。

<③ 自分が述べていること具体例を出す。>

以下のような用例は、この③の目的によって使われていると考えられる。

4) その「集団」に焦点を当てて政治変動を論じてきたのは、「革命論」、近年では「社会運動論」の立場からの研究であった。例えば、「社会運動論」の見地から政治変動の分析もおこなっているA・オーバーショール(Anthony Oberschall)は、社会主義体制の民主化について論じた文献で、もし集団による反対運動が存在しなかったなら、体制変動は民主政に至る前に終結していただろう、と論じている。 (国際政治)
上記の4)では、下線部前で「近年では「社会運動論」の立場からの研究であった」と述べ、それに続く文で、前文で言及した「社会運動論」についての具体的な論文を出している。このように一般的な内容を述べ、さらに具体的な内容を引用文で示している場合、こ

の③の目的によって使われていると考えられる。

<④ 自分が示した具体例を一般化するもの（解説するもの）として出す。>

本調査では、この引用の目的をさらに2つに分けた。その2つとは、「調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果と類似した例として引用文を提示する」と「調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果や事例に対して解説を行う」である。どちらも「調査結果や事例の一般化」を行うという目的は同じであるが、引用文の用い方が異なる。

まずは「調査結果の一般化を行うために、調査結果と類似した例として引用文を提示する」引用文であるが、それは以下のような例である。

5) Glaser (2000) は、身体的虐待を受けた子どもの脳は過覚醒の状態にあり、刺激に対して敏感に反応しやすいと述べている。本研究からも、被虐待児の色彩などの外部刺激への反応性の高さが示された。 (心理学)

5) では下線部で「身体的虐待を受けた子どもの脳は…敏感に反応しやすい」という内容の引用文を出し、また後続する文で論者が得た調査結果が引用文の内容と類似していることを示し、論者の調査結果の一般化を図っている。

またもう一つの引用の目的の「調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果や事例に対して解説を行う」であるが、これは以下の用例のような場合を指した。

6) 「外は危険」、「私が悪い」、「私は無力」、「もうこれで何もかもおしまい」などの外界への恐怖、自責感、恥辱感、無力感がDV被害者の場合によく見られる。こうした被害者に特有な認知様式を Foa. et. al (1998) は回復に向かう場合とそうでない場合、すなわち PTSD などの病的事態に陥る場合の二つに分けて図式化して説明し(図 1, 図 2 参照), (*途中省略) CBT は効果的であると論じている。 (心理学)

6) では、まず DV 被害者の具体的な事例が書かれている。この事例を引用文を用いて「被害者に特有な認知様式」と一般化し、さらに図式化しながら説明するといった解説が行われている。このように事例を引用文を用いて解説することで、具体的な事例から一般化されていた。

<⑤ これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す。>

以下のような用例は、この⑤の目的のもとに用いられていると考えられる。

7) 言語による国家統一政策はゲール語作品の出版を促し、文学と国家的主体を模索する場となる。特に Daniel Corkery の著名な *Synge and Anglo-Irish Literature* (1931) は (*途中省略) 排他的なナショナリズムを作り出す。北アルスター地方を残したまま大英帝国内の自治領となった自由国の不十分な統一、理念と現実の微妙なずれを文化が代補する形になった。Corkery らの主張が “curse of exclusivism” となり芸術への足かせとなったことを同時代の批評家 Sean O’Faolain は嘆いている (485)。 (英文学)

7) では、下線部の引用文前では Daniel Corkery の著書が「自由国の…微妙なずれを文化が代補する形になった」と述べ、一定の評価を与えている一方で、下線部の引用文でその Corkery の主張に対して否定的な意見もあることを記している。つまり、一つの事象に対して引用文を用いることで多面的に見せていると考えられる。

<⑥ 論点を分析する観点を出すために提示する。>

以下のような用例は、この⑥の目的のもとに用いられていると考えられる。

- 8) Kernberg (1976/1983) は、BPO の判断基準として、同一性の統合度、防衛機制の質、現実検討能力の三つの指標をあげている。本事例は、心理検査結果とともに、被害的・迫害的で all bad に偏ったとらえ方、現実的に話す状態と不安定になって話す状態との両極端な差、そして、脱価値化的・躁的防衛的な態度、といった面接場面での患者の様子からも、三つの指標を満たしていると思われる。 (心理学)

上記の場合、下線部の引用文は「BPO の判断基準」を書いたものである。この基準を用いて、次に続く事例を分析している。つまり下線部の引用文部分が、事例を分析する観点として提示されているのである。このように事例や調査結果を分析する際に、その依りどころとなる基準や枠組みなどを引用文を用いて示す場合があった。

<⑦ 自分が述べていること具体例として出しながら、同時にいろいろな視点を提供する。述べたい事柄を具体的に、かつ多面的に紹介する。>

これは本稿で追加した引用の目的である。これは佐渡島・吉野(2008)の「③自分が述べていること具体例を出す」と「⑤これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す。」を複合したものである。以下に用例を示す。

- 9) 被虐待児のロールシャッハ反応は、これまでいくつかの事例研究によって検討されている。久保田ら (1989) は身体的虐待を受けた 10 歳女児の事例検討から、(*途中省略)境界例レベルの問題を指摘している。森川 (1997) は、不適切な養育状況下にあった 13 歳女児のロールシャッハ反応を検討し、口唇攻撃性 (Hor) と作話傾向 (DR) を特徴に挙げている。 (心理学)

- 10) 東海の土器製作者が、なぜ繊維土器を受け入れ、それを作る伝統を持ったのかということを検討するためには、繊維土器に含まれる繊維の意味について考えることが必要である。山内清男氏の指摘以降 (山内 1929)、繊維土器が素地に草本類を練りこんだものだと考えられてきた (大場 1930 など)。一方、阿部芳郎氏は辻本崇夫・伊藤良永両氏の分析結果を基に、繊維は意図的に加えられたものではなく、粘土に元々含まれていたものである可能性を指摘し、低湿地性腐植土壌の粘土利用を考えている (阿部 1995・2002, 辻本・伊藤 1995)。(*途中省略) これに対し清水芳裕氏は、(*途中省略) 繊維を意図的に混入された青草だとしている (清水 1997)。 (考古学)

9) の波線部で「虐待児のロールシャッハ反応は、これまでいくつかの事例研究」があることが述べられ、その例として下線部に示した 2 つの異なる先行研究が紹介されている。「虐待児のロールシャッハ反応の事例研究」について 1 つの例を出すだけでなく、複数の例を出すことによって、その事例研究がより多面的に分かる。また、10) では、「繊維土器に含まれる繊維の意味を考える必要がある」と述べ、その考える材料として波線部に後続する文でいくつかの先行研究を出している。これらの先行研究は「繊維土器に含まれる繊維の意味」に関して述べられた具体的な例であり、かつ異なる見解を持つものであると考えられる。

5. 2 本調査における「～ハ～テイル」引用文の使用目的

以上の「～ハ～テイル」引用文の使用の目的をまとめると、次のようになる。

- ① 自分の主張を支持する意見として出す。自分の主張を強化する。
- ② 先行研究の不十分さを表すために出す。先行研究の不十分さを指摘することによって、その不十分な点を補完する内容を続けたり、また不十分な点を踏まえた上で主張を行う。
- ③ 自分が述べていること具体例を出す。
- ④ 自分が示した具体例を一般化するもの（解説するもの）として出す。
- ④a 調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果と類似した例として引用文を提示する。
- ④b 調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果や事例に対して解説を行う
- ⑤ これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す
- ⑥ 論点を分析する観点を出すために提示する。
- ⑦ 自分が述べていること具体例として出しながら、同時にいろいろな視点を提供する。述べたい事柄を具体的に、かつ多面的に紹介する。

5. 3 「～ハ～テイル」引用文の使用目的についての用例数調査

本調査では、「～ハ～テイル」引用文は全部で 116 例あった。これらを上記に述べた①～⑦の使用目的によって分類した。その結果が以下の表 1 ある。

表 1：各分類項目における「～ハ～テイル」引用文の用例数

分類項目	用例数
①自分の主張を支持する意見として出す。自分の主張を強化する。	12(10.3%)
②先行研究の不十分さを表すために出す。先行研究の不十分さを指摘することによって、その不十分な点を補完する内容を続けたり、また不十分な点を踏まえた上で主張を行う。	7(6.0%)
③ 自分が述べていること具体例を出す。	8(6.9%)
④ 自分が示した具体例を一般化するもの（解説するもの）として出す。	17(14.7%)
④a. 調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果と類似した例として引用文を提示する。	(7)
④b. 調査結果や事例の一般化を行うために、調査結果や事例に対して解説を行う	(10)
⑤これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す	21(18.1%)
⑥論点を分析する観点を出すために提示する。	15(12.9%)
⑦自分が述べていること具体例として出しながら、同時にいろいろな視点を提供する。述べたい事柄を具体的に、かつ多面的に紹介する。	18(15.5%)
複合	16(13.8%)
不明	2(1.7%)
合計	116(100%)

表1を見ると、引用文の使用目的間で極端な偏りは見られず、約18%~6%の間にあった。今回、最も多かった使用目的は⑤の「これまで述べてきた視点とは別の視点を提供しているものとして出す」で18.1%、その次に⑦の「具体例として出しながら、同時にいろいろな視点を提供する」で15.5%、そして「具体例の一般化」の14.7%が続いた。今までは、引用文の使用目的という、「他の人の意見を自分の意見を述べるための論拠としたり、反対に批判したりするために」(浜田1997:p9)使うことを考える場合が多かったと思うが、このように「別の視点を提供する」という目的で使われることも多いことがわかった。また今回の調査で特徴的だったのは「複合」も多数あったことである。「複合」とは、①~⑦の分類項目を組み合わせて使っていると考えられるものである。例えば、以下のような例がある。

11) しかしこのように、ようやくB男から逃げる事ができたものの、A子には以下に述べるような学習性無力的傾向が残ることとなり、新たなパートナーとの出会いによって、それは賦活されてしまった。例えばStrube (1988)とWalker (1991)は、学習性無力に彩られた社会的行動が、DV被害女性の根本的問題であると述べている。
 (*途中省略) またSchunk (1991)は、このような学習性無力の結果、受動性、抑うつ、将来に対する絶望の三つの状態が生じると述べている。 A子の来院時には、まさにこのような状態が生じていたと考えられる。(心理学)

11) では波線部で事例が説明されている。そして点線部の引用文でA子の事例に関する問題を解説し、問題をA子だけにとどまらせず、一般化して述べている。そしてさらに「また…」で始まる下線部の引用文では、別の視点(学習性無力の結果、何が起こるのか)を提供しながら、「A子の来院時に起きていたこと」を解説していると言える。つまり、この引用文は④と⑤の使用目的を合わせたものであると言える。

このように、引用文の使用目的は7分類のみではなく、それらを組み合わせた複雑な使用目的もあることがわかった。

6. 「~ハ~テイル」引用文の使用目的を重視した指導について

今まで引用文は、その表現方法やルールに重きを置いて調査、指導されてきた感がある。もちろんそれらは引用文の指導において不可欠であり、必ず指導される必要がある。しかしそれらを指導した後、その引用文をどのように論文中で使うかは学習者に委ねられることが多かったのではないだろうか。もしそうであるならば、引用文の使用目的を知るためには、多くの論文を読み自力でその機能を獲得していかなければいけないことになる。

そこで、そのような多くの時間を費やさず、引用文の表現方法やルールを学んだ後、教師が引用文の使用目的を紹介するのはどうであろうか。教師がまず提示してもいいが、引用文が多く書かれている論文を読んでもらい、学習者に引用文がどのように戦略的に使われているのか気づいてもらってもいいだろう。

以上は一つの指導例であるが、引用文の使用目的を紹介することは論文を書く際の道具の使い方を教えるようなものである。道具の正しい使い方を教えることで、剽窃などの道具の悪い使い方を防げるのではないだろうか。

7. まとめ

本調査では、人文系論文における「～ハ～テイル」引用文に着目し、佐渡島・吉野 (2008) で示された引用の目的をもとにしながら、実際の論文中で使用目的について記述および調査することを目的とした。引用文については、今までルールや表現法などが注目され、提示されてきたが、今回はその表現が「どのような目的で実際に使われているのか」を記述できた点が新しいと考えられる。前節でも述べたように、このような引用文の使用目的は、引用文の表現指導とともに、論を展開させる「道具」として学習者に提示していったほうがいいのではないかと考えられる。

今回は「～ハ～テイル」引用文だけを取り上げたが、引用文には他にも様々な表現方法がある。次回は他の引用文の表現が、どのような目的で使用されているのか、その使用目的は表現間で異なるのかどうかについて考察していきたい。

(清水まさ子 しみずまさこ・日本女子大学大学院・shimima2008@gmail.com)

注

1. 図1の右側の矢印部分を、二通は「表の上から下に行くにしたがって、形式面では引用文における原文の筆者の存在が希薄になり、論文への文章の統合の度合いが大きくなるように並べた」(二通 2009:p72)と説明している。ここではこれを略して「論文への文章の統合度」と呼んだ。
2. 事前調査で今回調査する著者フォーカス引用文で「～ハ～テイル」形の引用文と、テイル形文末の事柄フォーカス引用文を比較したところ、前者は116例だったのに対し、後者は54例と、前者の約半数にとどまった。
3. 2)や7)の用例中には「…看護改革を読み解いている (196)」や「…嘆いている (485)」のように数字が書かれているが、この数字は筆者が加えたものではなく引用文に書かれているものであり、文献のページ番号を示している。

引用文例の出典 本稿で用いた引用文の出典を下に示す。(なお下の文頭の番号は本稿で挙げた引用文の番号を表している)

1. 中村家子(2007)「学生相談における survival について」『心理臨床学研究』25(1), 84-95
2. 市川千恵子(2006)「帝国を「看護」する—フローレンス・ナイティンゲールの Notes on Nursing と Life or Death in India」『英文学研究』(83), 15-28
3. 板倉有大(2007)「打製石斧と横刃型石器の器種認定—桑飼下遺跡出土資料の再検討—」『考古学研究』53(4), 37-55
4. 笹岡伸矢(2007)「ソ連崩壊と集団的アクター—1 軍隊・反対政党・民族共和国—」『国際政治』(148), 59-73
- 5 および 9. 坪井裕子, 森田美弥子, 松本真理子(2007)「被虐待体験をもつ小学生のロールシャッハ反応」『心理臨床学研究』25(1), 13-24
- 6 および 11. 古賀章子, 前田正治, 津田彰(2007)「ドメスティック・バイオレンス事例に対する認知行動療法的アプローチ」『心理臨床学研究』25(1), 60-71
7. 川島健(2006)「Ireland is ‘Nowhere’ : 批評家 Beckett とアイリッシュ・ポスト

- コロニアリズム』『英文学研究』(83), 57-67
8. 岡田和久(2007)「病棟が併設されていない病院外来におけるBPO患者への解決志向的アプローチの工夫」『心理臨床学研究』25(1), 1-12,
10. 井上智弘(2007)「型式と素地—縄文時代早期後葉の繊維土器をテーマに—」『考古学研究』53(1), 28-46

参考文献

- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂(2005)『ピアで学ぶ大学生の日本語表現—プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房
- 奥田統己・神成洋・佐々木冠・本間徹夫・山崎哲永(2000)『読みやすく考えて調べて書く：小論文から卒論まで』学術図書出版社
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 小林康夫・船曳建夫編(1994)『知の技法』東京大学出版会
- 佐渡島沙織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書く人のためのガイドブック』ひつじ書房
- 清水まさ子(2008)「文系論文における引用文の表現方法」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』(14), 1-15
- 清水まさ子(2009)「異なる専門分野における引用文の表現方法：5種類の人文系論文を比較して」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』(15), 1-11
- 二通信子・佐藤不二子(2007)『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 二通信子(2009)「論文の引用に関する基礎的調査と引用モデルの試案」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』(I) アカデミック・ジャパニーズ・グループ, 65-74
- 日本学術協力財団(2004)『学会名鑑』日本学術協力財団
- 浜田麻理・平尾得子・由井紀久子(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版